



福音と世界

特集1 戦争を起こささない責任

国境線平和学校の平和運動

鄭 址錫

平和をつくりだすために

— 牧師として、一市民としてできること

栗原 茂

「暴力に抗う」ということ

斉藤小百合

特集2 地域事業の拠点としての教会

川崎教会と社会事業、そのはじまり

— 私的回顧から

李 省展

「コミュニティ」としての教会

佐々木炎

浦河教会とべてるの家

— その実際と今後の展望

山本光一

ウクライナ戦争即時停戦論とドイツのキリスト教会2

川田洋一

連載

インタビューシリーズ「女たちの闘い」

田島卓／今高義也／長尾優／山崎ランサム和彦

山口陽一／サンダース&ヤーバー

8

2024

新教出版社

特集1 戦争を起こささない責任 / 特集2 地域事業の拠点としての教会

「コミュニティ」としての教会

佐々木炎

ささき・ほのお

一九六五年生まれ。聖隷学園福祉医療ヘルパー学園卒、聖契神学校卒、日本社会事業学校専修科卒。一九九八年教会開拓と同時に教会堂で福祉活動「ホツとスペース中原」を創業。現在、日本聖契キリスト教団中原キリスト教会牧師、主任介護支援専門員やサービス管理責任者。東京基督教大学等で非常勤講師。社会福祉法人牧ノ原やまばと学園理事。

1. 教会とはなにか

私たちの「教会」は、神奈川県川崎市にあります。

「教会」とは、「コミュニティ」だと考えています。「コミュニティ」はドイツ語で「ゲマインデ」(Gemeinde)とも言い、「地域社会や地域住民全体を意味するだけではなく、キリスト教の教区と教区民全体を表現するために用いられる」とあります(富坂キリスト教センター『紀要』第一三号、一五七頁)。

つまり「コミュニティ」とは、教会と地域社会、教区民と地域住民であることが別々の存在や二項対立の関係ではなく、一致していることを意味しているとも捉えることができます。ですから「教会」とは、地域社会そのものであり、そこにおいてキリスト者であるかにかかわらず、「community」の「com-」(共に)という言葉が意味するように、共に生きる包括的な共同体なのです。そして、「munit」という言葉

が意味するように、「負担、重荷、好意」などを共有するつながりや関係なのです。

2. ホツとスペース中原の生い立ち

中原キリスト「教会」は、一九九八年一〇月の開拓と同時に、「ホツとスペース中原」という組織を立ち上げました。従来の日曜礼拝を中心とした教会形成ではなく、地域に住む一人ひとりの「生老病死」の苦しみ、そこにある「語り」に耳を傾けることに積極的にかかわるアウトリーチの活動、「コイノニア(交わり)」からはじめました。そこから「ディアコニア(愛の実践・社会的課題)」を共有し、「ケリユグマ(使信)」を分かち合うという実存的な働きを目指しました。この活動では無償のボランティアだけでなく、福祉の国家資格(介護福祉士・社会福祉士・精神保健福祉士等)を有する者

による質の高い支援の提供も行っています。職員は開所時から信仰の有無にかかわらず一緒に活動を展開し、現在は約九〇名の職員（キリスト者は約四〇％）が地域に仕えています。二〇〇〇年の介護保険制度開始時は宗教法人格として日本で最初に活動を開始、二〇〇三年には障害事業でも日本で初めて宗教法人格で活動を始めました。しかし二〇〇九年にNPO法人格としての活動に変更となりました。それは、私たちの教会が包括的な宗教法人格の一部であり、属する教団から福祉活動は「教会の働きにあらず」と決議がなされたからでした。それでも、神は万事を益としてくださり、「コミュニティ」は現在NPO法人として、多方面において地域の人たちと共に前進を続けています。

3. 多様な活動を展開

私たちの教会の働きで出会う人びとは多岐に渡っています。高齢者支援では、独居高齢者や認知症の人、寝たきりの人、看取り期の人など要介護・要支援高齢者に対して様々なケアを実施しています。そのサービスの多くは介護保険制度に基づくもので、「居宅介護支援」（ケアマネ）、「訪問介護」（ヘルパー）、「通所介護」（デイサービス、一日定員三二人、週六日）などです。また、同時に自費での様々な高齢者ケアも実施しています。

障害者支援も実施しています。うつ病や双極性障害、統合失調症などの精神疾患を抱えた人たち、知的に障害を抱えた重度から軽度の人たち、自閉スペクトラム障害（ASD）や注意欠如・多動症（ADHD）、学習障害などの発達障害の人

たち、身体障害者の人たちです。

近隣の事業所や病院、行政とも連携しています。また、「障害者総合支援法」などを活用する「居宅介護」（ヘルパー）の他に、近隣のアパート等を借りて「共同生活援助」（グループホーム）を運営し、現在三二名の人たちが地域で生活することを支えています。その他、少年院や刑務所から出てきた人たちの支援をする「地域定着支援事業」、法務省の事業である「自立準備ホーム」を行って、「ハウス（住む家）」「ホーム（家庭的居場所）」「社会参加」「友愛関係」を支援しています。

さらに制度の狭間にある人たちや明確な支援は必要ではないが何らかのSOSを出している人たちに向けて、多くの取り組みを行っています。例えば、児童相談所から虐待被害等を受けた児童の一時的な保護の場所として、団体が確保している住居を提供しています。また教会の礼拝堂では、地域の人たちが集う「ホッとカフェ」（食事会）や「親子広場」（親子の居場所づくり）、「居酒屋ホッと」（子育て世代の人たちがつかの間休息する場所づくり）に活用されています。

これらの活動以外にも、子どもやひとり親、生活困窮者、在留外国人、ひきこもり者、依存症の人などのかかわりから、その時々に必要な支援を柔軟に行う「ワンストップ支援」を実施しています。その中にはもちろん、経済的に豊かな人たちや社会的地位の高い人たちも含まれており、年齢や性別、経済状況、制度が利用できるかどうかなどの分断線を越えて、「全世代・全対象の包括的かわり」を創出しています。それは同じ社会、地域に生きる全ての人と共に「神の

「国」を求めた活動を行うという私たちの教会の考え方、法人ミッションがあるからです。

4. 多様な職員と共同創造（コ・プロダクション）

一緒に働く職員は多様な人たちで構成されています。うつ病や統合失調症、双極性障害などの精神疾患のある人たち、知的や発達に障害がある人たち、免疫機能障害など身体障害のある人たちなども一緒に働いています。ときには病気などが原因で出勤当日に休む人もあり、現場はてんでこ舞いになることもあります。また、触法者の人たちも六人ほど職員として働いています。ひきこもりだった人たちやひとり親家庭の人たち、在留外国人の人たちも働いています。私たちは、治ったり、更生したり、社会に適応できたりしたら仲間として受け入れるのではなく、まずは仲間として受け入れてかわる過程を大切にしています。かわる理由は、悔い改めさせ、変えるためではありません。当事者は多くの逆境を経験し、同時に、そこで味わった痛みや挫折に耐えながら生き延びてきた「力」や乗り越える「英知」を持っていきます。私たちはむしろ当事者から学ぶことができるのです。この受肉した賜物は、何にも代えがたい当事者のキャリアであり、神の働きの宝物となり得るものではないでしょうか。

共同体は、当事者たちが傷つきながら得た英知を共に分かちあい、「共同創造」（コ・プロダクション）することなしには成熟しませんし、その先にしか神の国はないと確信しています。これまで社会が置き去りにしたり、憐れみの対象としか見なさなかつたりした人たちも含め、全ての人が相互的に関

係する「コミュニティ」の形成が求められていると考えています。そのスタートが、多様な職員と協働するということだと捉えています。

5. パリアティブホーム

私たちの教会は四年前、「パリアティブホーム」（Palliative Home）というシェアハウスを建てました。「Palliative」の語源はラテン語で「Pallium」といい、コートやマントを意味します。

私たちの人生は、いのちを脅かす病、逃れられない老い、障碍による苦しみ、経済的な困窮、人間関係の破断、明日の見えない不安、癒えない過去の悲哀など、様々な困難に直面します。その現状にたとえ解決が見いだせなかったとしても、そこにそつとコートやマントをかけるように、人を暖かく包み込み「希望」を灯すことのできる場所——そのような場所にしたという願いを込めてパリアティブホームは建てられました。この場所は、身体的、心理的、社会的、文化的、スピリチュアルな側面を考慮した包括的なケアを行うための場所です。

四階建の一階は、日曜日は礼拝スペースとなります。それ以外の日は高齢者のデイサービスの場になります。二階は事務所とコミュニティスペース（リビング）、三・四階がワンルームを中心とした住居スペースとなっています。住居には、信仰の有無に関わりなく、認知症の人や障碍のある人、親元に帰ることのできない若者、在留外国人、刑務所から出てきた人たちが助け合って生活をしています。

6. 周縁者からの宣教からはじまる

一年前のある日、「パリアティブホーム」にAさんが入居してきました。Aさんは刑務所から出てきた四〇歳代の人です。初日、Aさんは尋ねてきました。

「佐々木さん、どうして私のような、社会から排除され誰からも必要とされない人の身元引受人になってくれたのですか。私なんか生きるに値しないのに……」

Aさんは帰る家も、待っている家族もない孤独な存在となっていたのです。経済的に困窮し、糖尿病などの病を負い、未来の見えない自分と向き合い、刑期を終えて社会に戻ったけれど、自分に生きる意味や価値などないと思い込まざるを得ない現実が待っていました。私はAさんの問いに返す答えなど持ち合わせていませんでした。

シェアハウスのAさんの隣の部屋には、八七歳の認知症の女性Bさんが住んでいました。Aさんがやってきた初日から事件は起きました。認知症のBさんが夜中に「ひとり歩き」(俗語/徘徊)をして、Aさんの部屋のドアをガタガタさせたのでした。するとAさんは「このやろう！」と怒鳴るのではなく、自室へ招き入れ、ゆっくりと話を聞いてくれたのです。

その後も、Bさんは夜間の不安によるひとり歩きが続きましたが、Aさんはその都度Bさんの話を聞いてくださり、不安をやわらげてくれたのです。私はそのような様子を見かねて、Aさんに今の部屋では生活が大変だから別の棟の個室へ移動してはどうかと提案しました。するとAさんは答えました。

「このまま一緒に住んでいいですか。Bさんの力になりました」

いのです」

夜の暗闇に不安を抱え、彷徨っている認知症のBさん、真の隣人としてコートをかけたのは刑務所から出てきたAさんでした。また同時に、認知症のBさんが、Aさんに生きる価値を与え、希望を灯す存在となりました。私は二人の姿をみながら、まだ見ぬ「神の国」を垣間見させてもらうことができました。

7. 私の存在の「通奏低音」(常に底流としてあるもの)

ここからはより実存的な問いを掘り下げたいと考えています。それはなぜ私がこのような活動をしているのかということとです。それは私に刻まれた体験があるからです。

私は一九六五年、非嫡出子(法律上の婚姻関係のない男女間に生まれた子)として生まれました。私の父は四〇代るとき、精神疾患と診断されて入院をしていました。その父が、二八歳年下の母に助けられ、夜中に病院から抜け出し駆け落ちをしました。逃げ出したものの、病の中にある父は仕事ができず、二八歳年下の母が生計を支えました。逃避行の連続で、他人の家の軒先を借りるなどして同じ場所に三か月と定住していられたかったそうです。飢えの連続で、約一〇年間のホームレス生活の中、母のお腹に私という生命が宿ったのです。社会通念上、私は生まれることが許されない存在でした。しかし、母は悩み抜いた末、周りから見れば愚かと思える決断をしました。その愚かに思えるような決断によって私はこの世に生まれ、今ここに存在しています。多くの反対がある中で、母が私を産む決断をしなかったならば私は存在しません。

その後、両親は地域から排除され、居住地域から離れた場所、自分たちでごみ置き場から資材を拾い集めて小屋を建てました。そこには水道も電気も通っていませんでした。明かりはロウソクで、隙間風が吹き、冬は寒さに震えました。雨水をためてタオルで体を拭きました。その後も父は働けず、収入は母のパートだけという極貧の生活でした。私は幼心に、人が出自で排除され差別される苦しみがあることを感じていました。同時に人は生まれながらに尊く平等であって欲しい、差別されてはならないと感じていました。

生活環境だけではありませんでした。私は父から虐待を受けて育ちました。暴力こそ人生に必要なだと学習しました。学校の成績は悪く、友だちの家やゲームセンターに入り浸り、夢も希望もない中で、一七歳のときに気がつけば不良グループのリーダーになっていました。

そのグループで出会った仲間たちが直面している問題は、社会の負の縮図そのものでした。私と同じように、家庭の誰かが病気であるとか、失業、貧困、ひとり親、アルコールやギャンブル依存症、借金苦、DV等々。仲間のほとんどの家庭が、複数の深刻な問題を抱えて家庭が崩壊していました。私は仲間と一緒に困っている人たちの相談に乗り、その家に赴き、ときにはカンパを集め経済的な支援もしました。しかし、私たちのささやかな助け合いは物事の根本的な解決にはならず、どうしようもない絶望に涙するしかありませんでした。人間が能力の優劣ではなく、ただ自分のままで認められる社会、「助けて」という声なき声を受け止められる場所、そのまま「つらかったね」「よくここまで生きてきたね」

と受け止めてくれる誰かを求めてさ迷う日々でした。

その後、私は紆余曲折を経て教会に通うようになり、その教会の牧師が福祉の活動と教会の牧会を担っている姿をみて、牧師になろうと考えました。二年後、静岡県浜松市にある聖隷事業団の福祉学校に入りました。その隣接する場所で重度心身障碍者の糸繰俊二さんという同じ年齢の若者と出会いました。「ウー！」と奇声を上げ、よだれを垂らし、排泄も、食事も、着替えも、すべて介助がなければ生きていけない人でした。その彼との関係が続き、卒業間近、彼は私に五十音表を指し示しながらこう語ってくれたのです。

「佐々木君、ぼくのような人たちの支援をして一緒に生きる人になって欲しい。ぼくたちがいつか街で普通に暮らせるようにして欲しい。君ならできる」

神という方は、私に今も、重度心身障碍の中で生きる彼の苦しみを忘れずに、価値ある生き方をして彼に報いているのかと問いかけています。彼が障碍とそこから生まれる苦しみを背負い、示してくれたことの重さを感じ続けています。

この社会から小さくされ、弾かれ、苦しんだ母と糸繰さんの存在が、私の活動の「通奏低音」として今も人生を動かしています。そして現在の活動につながっています。

8. 現代社会の現状

現代社会は、多くの人が脆弱性のただ中にあります。要介護高齢者は六九一万人、認知症の人は一〇〇一万人、障碍者は一一六〇万人、アルコール依存症者は四四〇万人、ギャン

ブル依存症の人は一九六万人、生活保護受給者は二〇〇万人超、サラ金利用者は一〇二一万人、児童虐待は二一萬九一七九件、小中学校の長期欠席者は約四一万人、ひきこもりの人は約一四六万人、自殺未遂者は約五三万人、ワーキングプアの人約一二〇〇万人等々。生きづらさを抱えた人は枚挙にいとまがない状況です。神の約束の実現である、互いを尊重し、差別、貧困、抑圧、排除、無関心、暴力などのない、誰もが等しく尊ばれ、自由で平等な社会が実現することからほど遠い現状です。

これらは、特にライフイベント（就学・就職や転職・結婚・出産・子育て・教育・子どもの進学・定年退職・加齢・身近な人の死別など生涯経験すると予想される出来事）に対して、社会構造の変化、とくに家族や地域、会社などにおける人との「つながり」が薄くなり、誰もが孤独・孤立状態に陥りやすい状況で対処が困難であることが要因だと考えられます。今後、単身世帯や単身高齢世帯、身寄りのない人の増加が見込まれる中、コミュニティの「つながり」はますます求められていくでしょう。

9. 「教会」として「コミュニティ」の具現化のために

現代社会において、教会という「コミュニティ」は、より大きな可能性を秘めています。教会はすべての人々が、出自、宗教、人種、民族、国籍、性別、性自認、年齢、文化的背景、社会的地位、経済状況などの違いにかかわらず、かけがえない存在として尊重される場所です（ガラテヤの信徒への手紙3章28節）。

特に、誰もが直面するライフイベント毎の危機、老いや障り、受け入れがたい病や死というものを被る恐れから生まれる「苦しみ」（スピリチュアルペイン）に対して、いつでも逃れることのできる安全な避難所を求めています。すべての人が、安心して苦しみに向き合あい、思い巡らすことのできる場所として、「教会」という「コミュニティ」が求められていると思います。

私たちの生涯は、困難から逃れることができません。それは一人一人の苦しみ（*Passion*）から、十字架の受難（*The Passion*）に接続し、連帯するように招かれているからです。私たちの苦しみは、主イエスの十字架への旅路なのです。

神は、どこまでも私たち一人一人を、「見失った一匹の羊」のように、二人称で今も探し求め、愛というコートを掛けようとしています。主イエスは今も自ら、愚者である私たちの漆黒の場所まで来られ、私たちの頬を流れる涙を、十字架で打ち貫かれた傷の御手で拭い、掬おうとしています。

ですから私は、今日も、明日も、これから、主イエスの愛のコートに包まれ、有限で脆い身体性をもって、一人一人の傍らに赴きます。その場に留まり、その一人の人の漏れるように紡ぎ出した小さな「語り（*narrative*）」に耳を傾け、その人のかけがえない神の「*Grand narratives*（グランド・ナラティブ）」へいつかつながることを祈りつつ、何度も何度も躓き、失敗を繰り返し、迷いながらもなお、コミュニティのなかで「共苦（*com passion*）」をし、あの方に委ねていくのです。